

フランス中央高地におけるランドネとツーリズム

— R.L.ステューブソン『旅はロバを連れて』 —

市川康夫

筑波大学生命環境系

本研究は、19世紀末の紀行文『旅はロバを連れて』（R.L.ステューブソン著）に着目し、フランス中央高地におけるランドネとツーリズムの関係を文化的資源とのかかわりから論じたものである。ステューブソンの道は、フランスランドネ連合（FFR）によるルート整備が契機となり、ステューブソン組合の結成によって実現した。組合はEUや国、地域からの補助金によって成り立ち、さらに営利を主目的としないことでオルタナティブなツーリズムが形成された。一方、ランドネ旅行者は、文化的資源だけではなくランドネを通じて得られる自己の体験、あるいはイメージに旅の動機を向けていた。まだ見ぬ土地への何かを求める欲求、そしてテロワールを感じる場所としての山村イメージが、セヴェンヌのランドネへと旅行者を駆り立てている。ステューブソンの道は、ランドネ旅行者と文化、自然、テロワールとの相互作用の過程にあるツーリズムということができよう。

キーワード：ランドネ、文化的資源、紀行文、『旅はロバを連れて』、ツーリズム、フランス

I はじめに

1. 研究課題

近年、健康や環境への関心が高まるなか、ハイキング・トレッキングのブーム、トレイルやフットパスの整備によって、「歩くツーリズム」が注目を浴びている。特にヨーロッパでは、「サンティアゴ・デ・コンポステラへの道」が世界的に注目されたことで、徒歩によるツーリズムへの需要が増大している。

そこで本研究が注目するのは、フランスにおける「ランドネ（Randonnée）」である¹⁾。フランスでは歩くアクティビティの総称は「ランドネ」と呼ばれ、国民が好むスポーツの第一位となっている（Pôle Ressources National Sports de Nature, 2011）²⁾。また、バカンスにおいてフランス人の最も多くが選択するアクティビティは「歩くこと」である（CMA Haut-Savoie, 2011）。ランドネ愛好家の多いフランスでは、約600万人が15年以上の継続的なランドネ経験を有しており、ランド

ネはスキーと並んでフランス山地ツーリズムの二大要素となっている（Guilbert, 2003）。

グランドツアー以降、歩くことはツーリズムにおける最も基礎的な行為として認知されてきた一方で、1980年代以降に発展してきた「歩くツーリズム」であるランドネは、いわば「古くて新しいツーリズム」ということができる（Corneloup, 2012）。他方、ランドネに関しては学術研究の分野から十分な注目を受けてこなかったことが指摘されており、その理由として経済的な価値評価の難しさが挙げられている（Association sur le chemin de R.L. Stevenson, 2010；Farama, 2012）。しかし、現在フランス国内で整備されたランドネのルート総延長は約10万kmを超えといわれ、その潜在的な経済価値はもはや無視できない（CMA Haut-Savoie, 2011）。また、特にランドネ旅行者の目的地の大半が山間地域であり、近年バカンス地として再注目されている農山村を鑑みた場合、その存在は重要な要素といえる（Pôle Ressources National Sports de Nature,

2011；Versant Sud et Altimax, 2009)。

ランドネに関する既存研究としては、ジュラ山脈におけるランドネツーリズムの発展過程をツーリズム化への経緯から論じたMuller (2012) やアルプスのツーリズム形態についてランドネの組織や組合の実態から明らかにしたChaumereuil (2012)、オート・サヴォア県におけるランドネとスポーツについて (CMA Haut-Savoie, 2011) やフランス国内のランドネの実態についてその整備や山間地域との関わりからみた研究がある (Versant Sud et Alimax, 2009)。こうした研究を含め、ランドネに関する論文や資料はジュラ山脈やアルプスなど自然地形を利用した登山に近いランドネが対象とされる傾向にある。しかし、ランドネは、アルピニズムに基づく冒険的スポーツというよりも、文化・社会的要素 (遺産, 芸術, 宗教, 哲学, 人間性) を含むという点が特徴であり、且つこの点がハイキングやトレッキングとの相違でもある (Corneloup, 2012)。

よって、現代のランドネを捉えるうえでは文化的な要素を含むランドネへの注目が今後求められるであろう。これに関連し、Berthelot et al. (2012) は、歩くツーリズムを文化的な体験や要素を重視する「コンフォート型」とより登山やアルピニズムに近い「アドベンチャー型」の2類型に分類しその特徴を論じた。これによると、若年層を中心とする短期で安価な滞在による「アドベンチャー型」に対し、「コンフォート型」は中高年による長期滞在を基本とし、景観や徒歩旅行による発見の喜びを重視するものとされている。これら2類型のなかでも、文化的なランドネはよりコンフォート型に近く、特に団塊世代である中高年層の存在はフランスにおいて新たなツーリズム需要を生み出している (CMA Haut-Savoie, 2011；Humeau, 2012)。以上から、今後のランドネ研究においてはこうした中高年層と歩

くツーリズムとに関する背景を踏まえ、文化的体験を含むランドネに注目をしていく必要がある。

そこで本研究では、文化的なランドネの事例として、マッシフ・サントラル南部のセヴェンヌ地域における19世紀末の文学作品を活用したランドネの事例「スティーブソンの道」を取り上げる。分析の方法としては、既存の研究にみられるような組織構成や全体の統計だけではなく、文化的資源がランドネを通していかにツーリズム資源化し、それを消費する旅行者との間にどのような関係が存在しているのかに注目したい。Humeau (2012) が指摘するように、地域開発の手段としても注目されるランドネにおいては、ミクロなローカル主体からより広域の主体との連携関係が重要になる。また、ランドネは単なるツーリズムとしての意味だけではなく、地域や人間、自然との結びつきを生み出す可能性も有している (Corneloup, 2012)。したがって、本稿ではランドネに関わる主体の結びつきがどのように形成・発展しているのかを、文化的資源の再活用過程から注目する。以上より、本研究の目的はセヴェンヌ地域のランドネにおける紀行文の再活用事例の考察から、文化的資源と山村ツーリズムの関係性について明らかにすることとする。

2. 研究対象地域

本研究の対象地域は、フランス中南部のマッシフ・サントラルの中央部に広がる山間地帯である (図1)。マッシフ・サントラルはフランス最大の山地であり、酪農をはじめ畜産の盛んな農業地帯である。景観をみると、長期的な侵食によって平坦となった火山性の高原地帯に、林地と牧草地が続く自然景観が広がっている (図2)。マッシフ・サントラル南部は、大都市や市場との遠隔地にあることからフランスの条件不利地域としても知られており、新たな産業や雇用、ツーリズム機会の

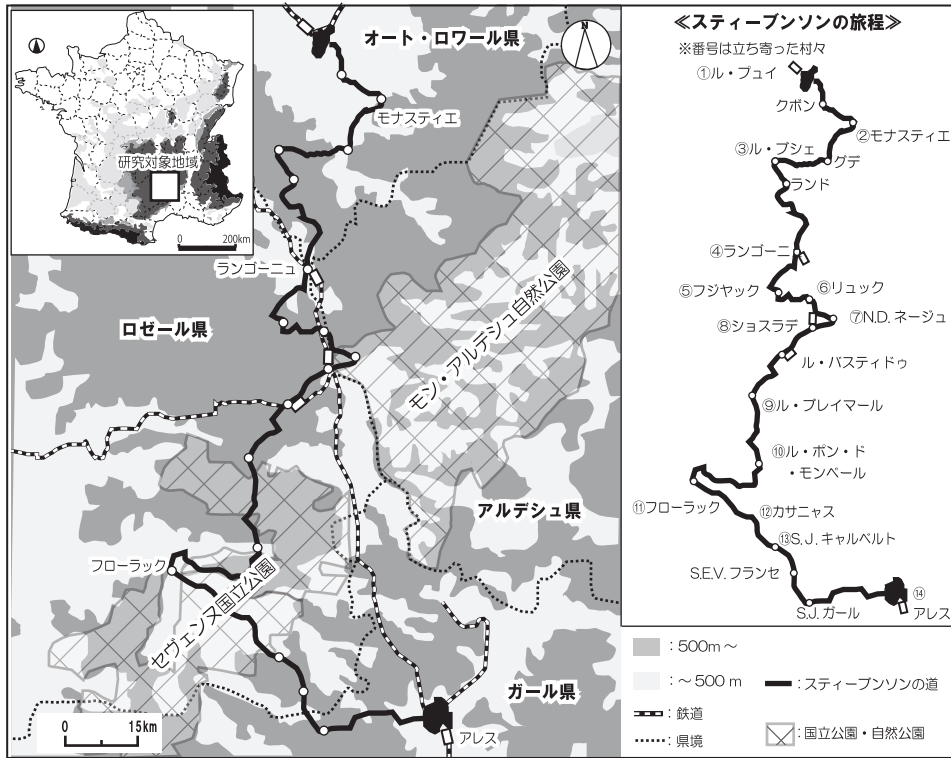


図1 研究対象地域



図2 ヴレイ地域の景観

モナステイエ村から南側の地域の景観。高原地帯で、なだらかな山地に牧草地と林地が分布している。
(2012年8月筆者撮影)

創出が地域発展における重要課題となっている。またマッシフ・サントラルは、歴史や景観、遺産

などの文化的資源に恵まれている一方で、その潜在的な資源が十分に活かされていない地域ともいわれる (Tijou, 2012)。

そのなかで、マッシフ・サントラルの南部に存在する文化的資源を活用したツーリズムを行っているのがセヴェンヌ地域を中心とした山間地帯である。このセヴェンヌ地域には、19世紀末に英国人作家スティーブンスンが歩いた道が存在し、彼の旅行記をもとにした山村ツーリズムが提供されている。このランドネの道は、ヴレイ地域からセヴェンヌ地域を約252kmにわたって横断しており、オート・ロワール県の中心地ル・プエイ・アン・ヴレイからガール県のアレスに至るまで、3つの地域圏と4つの県に跨るルートとなっている。旅のなかで実際にスティーブンスンが立ち寄ったのは14の山村集落であり、スティーブン

ソンの道はこれら山村集落を拠点に山中の道から耕地・牧草地を横切る農道、集落内の未舗装路やアスファルトの自動車道路などを組み合わせてできている。ランドネの旅行者達は、バックパックを背負いながらこの高原地帯のルートを歩き、道沿いに点在する村に滞在しながら徒歩にて移動をしていく（図3）。

II 紀行文『旅はロバを連れて』とスティーブソン

本研究で取り上げる紀行文の作者は、『宝島』や『ジキル博士とハイド氏』などで著名なロバート・ルイス・スティーブソン（Robert Louis Stevenson, 1850～1894年）である（図4）。生まれつき病弱だったスティーブソンは青年時代から肺を患い、その人生は常に病との闘いでもあった。度重なる病によって生きることに強く執着したスティーブソンは、生きるその意味を特に旅へと求めた人物であった（スティーブソン, 1951）³⁾。病氣療養を兼ねて世界中を放浪したスティーブソンは、作品の多くを旅のなかで執筆している⁴⁾。本研究で取り上げる『旅はロバを連れて（英題：Travels with a Donkey in the Cévennes）』は、こうした放浪の旅が元となった作品である。



図3 セヴェンヌ地域を歩くランドネ旅行者
（出典：Bancaud, H. (2007)）

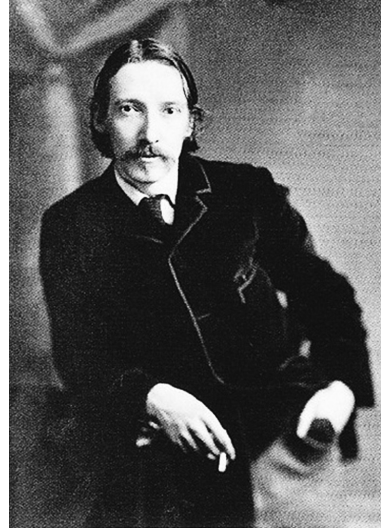


図4 R. L. スティーブソン
（1888年）

スティーブソン38歳の時の肖像写真。妻と連れ子と共にアメリカへ移住した翌年の写真である。

（出典：Warolin, N. (2009)）

スティーブソンは、青年時代からヨーロッパのなかでも特にフランスを好んで訪れている（広本, 2005）。紀行文『旅はロバを連れて』の元となったセヴェンヌへの旅は、後の妻となるファニー・オズボーンとの別れが契機といわれ、失意を慰めるべくフランス山村へと旅に出た11日間の旅行記⁵⁾は、スティーブソンの初期の代表作といわれている。

『旅はロバを連れて』における1878年9～10月のスティーブソンの旅程を表1に示した。彼は、まずオート・ロワール県の中心地ル・プユイから20km程に位置するモナステイエ・シュル・ガゼイユ村において、旅の身支度を兼ねて一か月ほど滞在している（図5）。モナステイエ村は、標高930mに位置する人口1,700人ほどの村であり、畜産が卓越するヴレイ地域の中心地である。モナステイエ村を出発地としたスティーブソンは、9月22日に村を発ち、荷を括るため購入した雌口

バのモデスティヌの扱いに苦闘しながらル・ブシエ・サンニコラスからランゴーニュへとヴレイ地域を46kmにわたって横断している。ステーブソンは、23日にはジェヴォダン地域へと入っていたが、夜中に道に迷ったあげく村人からの助けが得られず森の中で野宿をしている。その後、

表1 ステーブソンの旅程と宿泊地 (1878年)

日時	地域	宿泊地(標高m)	行程(km)
9月22日	ヴレイ	モナステイエ(930m)〜ル・ブシエ・サンニコラス(1217m)	21
23日		ランゴーニュ(915m)	25
24日	ジェヴォダン	野宿	28
25日		リュック(971m)	
26日		ノートルダム・デ・ネージュ(1081m)	9
27日	ロゼール山	シヨスラデ(1150m)	15
28日		野宿	35
29日		ル・ボン・ド・モンペール(875m)	
30日	セヴェンヌ	フローラック(546m)	28
10月1日		カサニャス(693m)	16
2日		サン・ジェルマン・ド・キヤルベルト(489m)	14.5
3日		サン・ジャン・ドゥ・ガール(189m)	20.5

(出典：Stevenson, R. L. (1879))

リュックを通過したあとの彼は、そのままジェヴォダン地域を南下せずに、目的でもあったノートル・ダ・デ・ネージュの僧院に立ち寄り一泊をする。再びジェヴォダンから出発した彼は、2度目となる野宿を経ながら27日にロゼール山へと入り、29日には山を越えてセヴェンヌ地域へと至っている。セヴェンヌ地域を縦断しながらフローラックからサン・ジェルマン・ド・カルベルト(図6)へと移動したステーブソンは、サン・ジャン・ド・ガールでモデスティヌを売り払い、アレスへと向かう。紀行文は、ステーブソンが馬車のなかで別れたロバのモデスティヌを思い涙する描写で終わっている。

この紀行文では、ステーブソンが歩くなかでの細かな体験が克明に描写されている。それらは見知らぬ土地で出会ったフランス農村民たちとのやりとり、宿屋や野宿での出来事やモデスティヌの様子、人々の信仰や宗教、当時の社会背景にいたるまで多岐にわたる。また紀行文には、村名や地形、景観が細かく記載されており、ランドネ旅行者はルートのなかでこれらを追体験すること

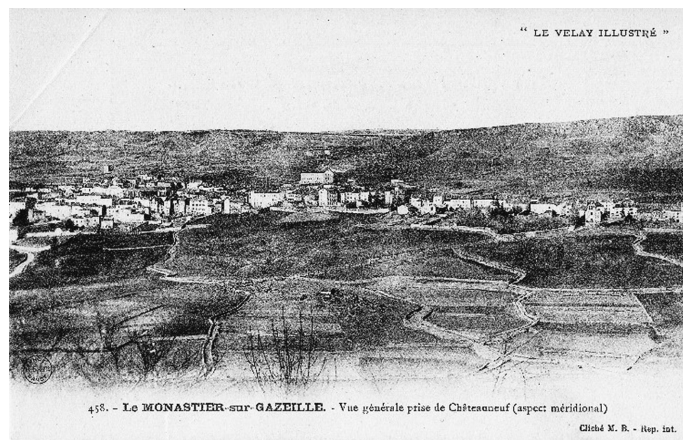


図5 旅の出発地モナステイエ・シュル・ガゼイユの遠景 (1910年代)

モナステイエ村は、オート・ロワール県にある小さな山村である。ステーブソンは旅の前にこの村に滞在し、旅を共にしたロバのモデスティヌを購入している。

(20世紀初頭の絵葉書より：Margerid Bremond撮影)

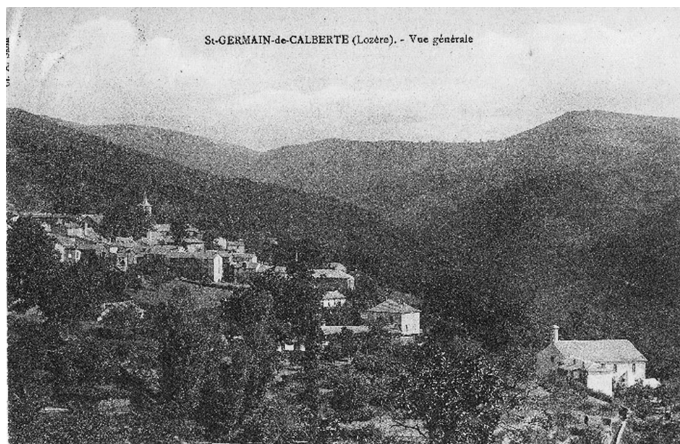


図6 サン・ジェルマン・ド・キャルベルトの遠景（1900年頃）
 スティーブソンが旅の終盤で立ち寄った山村。セヴェンヌ国立公園の山あいにある人口450人ほどの静かな村である。
 （20世紀初頭の絵葉書より：A. Sanu撮影）

が可能となっている。

Ⅲ 「スティーブソンの道」組合と山村ツーリズム

1. フランスランドネ連合（FFR）と「歩くツーリズム」の整備

スティーブソンの道の発足において重要な存在を果たしたのが、ランドネを普及・推進している「フランスランドネ連合（FFR）」⁶⁾である。フランス国内のランドネは彼らによって担われているといっても過言ではない。FFRは、1947年に発足した団体であり、国内のトレッキング団体や旅行クラブ、キャンピングクラブなどを統合して発足したCNSGR（Comité National des Sentiers de Grande Randonnée）を前身としている。CNSGRは1978年に、国の省庁「フランス青少年スポーツ省」（Ministère de la Jeunesse et des Sports）の管理のもとFFRへと改称し、これ以降FFRはランドネを通して自然や環境を維持・保護する国家的役割を担う存在となっている（Humeau, 2012）。2014年時点でのFFRの会員数は22万人、所属ク

ラブ数は3,400団体であり、フランスで最も規模の大きいランドネ組織である。

パリに本部を置くFFRの主な業務は、ランドネのためのルート整備とその管理、案内板の設置管理、全国統一のルート・ガイド（Topo-Guidesシリーズ）⁷⁾の出版である。ランドネルートの種別には複数が存在し、いくつかの地域圏を横断する長距離ルート「グラン・ランドネ（GR：Grande Randonnée）」、特定の地域内でその土地の自然や文化を知る「グラン・ランドネ・ド・ペイ（GRP：Grandes Randonnées de Pays）」、数時間での周遊が可能な短距離ルートの「プロムナド・エ・ランドネ（PR：Promenades et Randonnées）」が主なものである。ルートにおいては、FFRに所属する6千人のマーキングボランティアが管理を担い、白・赤・黄を組み合わせた指示マークが看板やプレート、樹木にペンキやテープによって明示され、ランドネ旅行者はこれらが示す順路を頼りに歩いてゆく。FFRではフランス国内で合計260タイトルのルート・ガイドを発刊しており、一般のランドネだけではなく、森林ランドネ、都市

での徒歩散策、自然や歴史・遺産などの教育目的のランドネなど複数種類を出版している。これらFFRによるランドネルートの国内総延長は、1952年に1千kmだったものが、1972年に1万kmに、2014年には18万kmにまで達している。この2014年の総延長のうち、GRとGRPは合計6.5万km、PRは11.5万kmである。

FFRの会員をみるとフランスにおけるランドネ愛好家の特徴がみてとれる。会員のうち女性が占める割合は62%と高く、全会員のうち50歳以上は70%におよぶ（Pôle Ressources National Sports de Nature, 2011）。会員は主にパリ、マルセイユ、リヨンの三大都市圏に分布し、イル・ド・フランス地域圏に12%、プロヴァンス・アルプス・コートダジュール地域圏に12%、そしてローヌ・アルプ地域圏に10%である。ランドネの目的地をみると、全会員のうち73%が農村を目的地とし、そのうちの67%が山間地域へと向かっており、ランドネにおいて重要な消費地は農村や山間地域であるといえる。

フランスにおけるランドネのルートは、主に自然型のルートと文化型のルート2類型があり、このうちフランス国内では「グラントラベルセ・アルプス」、「グラントラベルセ・ジュラ」のような山地の自然地形を利用した自然型が主流である。一方、文化や歴史、それにまつわる物語を含むルートは多くはなく、スティーブンスンの道はブルターニュ地方海岸線の「税官吏の道」、フランスからスペインの聖地へと向かう「サンティアゴ巡礼路」などと並んで文化型ランドネの代表的な事例である。

2. 組合の発足と構成

スティーブンスンの道は、紀行文が出版されて以降、100年以上にわたって長らく忘れられた存在となっていた。この埋もれた文化的資源が再活

用される契機となったのがFFRによるスティーブンスンの道のルート化である。FFRはスティーブンスンの道を紀行文『旅はロバを連れて』を元に当時の道を「グラン・ランドネ70(GR70)」(1993年)としてルート指定、そしてガイドブックの発刊を行い、この道が再び注目される契機を導いた。

「スティーブンスンの道」は、主に二つの主体によって管理されている。一つは、ルート整備などハード面を中心としたFFRであり、そのほかソフト面の業務・活動はすべてローカルな地域主体によって構成される「スティーブンスンの道組合」が担っている。彼らの業務は、スティーブンスンの道に関わる宣伝活動のほか補助金などの資金調達、様々なイベントやアクティビティなど多岐にわたり、組合の存在はスティーブンスンの道のツーリズムにおいて主要な役割を果たしている。

スティーブンスンの道組合は、スティーブンスンの道がグラン・ランドネ70に指定された翌年の1994年に発足した。スティーブンスンの道組合の設立目的は、スティーブンスンの道を広め、自然・文化的遺産の価値を保護すること、そしてランドネを通じてツーリズムに関わるローカルな主体と多様な地域イニシアティブのネットワークを構築することである。スティーブンスンの道組合の本部はポン・ド・モンベールに置かれ、この本部で様々な業務が行われている。スティーブンスンの道組合の特徴は、被給与者が事務を行う三人のみであり、全ての組合員は無給であるという点である。被給与者の3名は、広報（HPやパンフレット等）、会計管理、組合への問い合わせ対応、年報・事業報告の資料作成を業務としている。

組合本部によると、2013年のスティーブンスンの道組合には147の組合員および団体が所属している。これら組合員を、業種別に分布を示したものが図7である。組合員および団体の属性は多

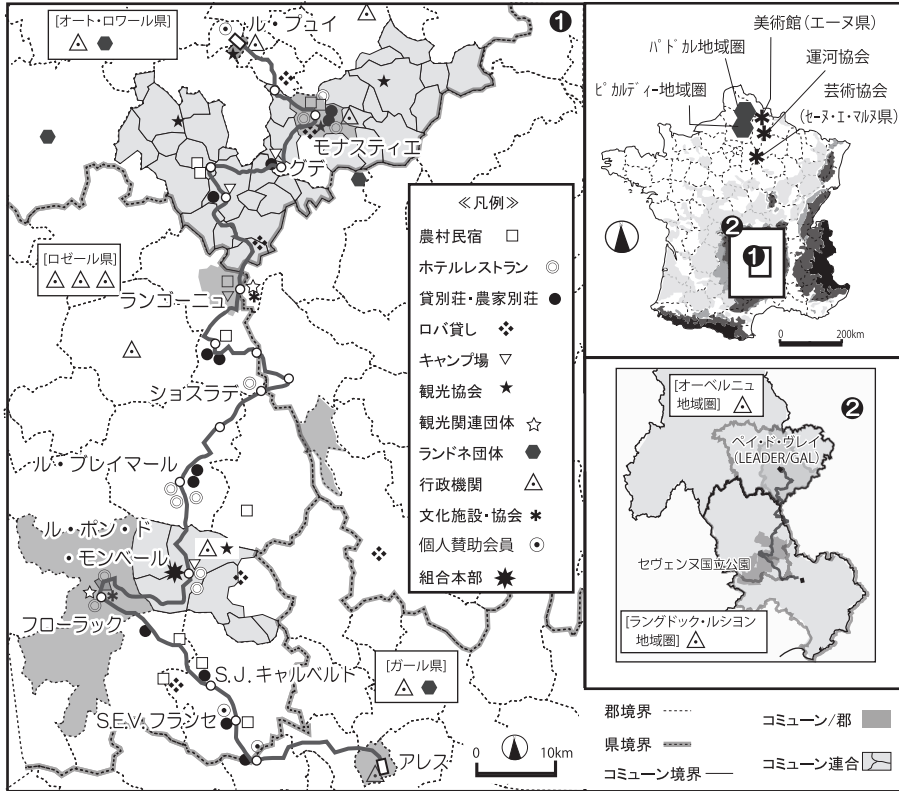


図7 スティーブンスンの道組合員の分布と属性 (2013年)
(組合員名簿および総会参加者名簿より作成)

岐にわたるが、いずれもツーリズムおよびランドネに関わる主体、あるいは文化や作家スティーブンスンに関わる主体が所属している。これらのなかで、主要な属性は以下の4つであり、それぞれ宿泊施設、観光関連主体、ランドネ団体、行政である。これら組合員の施設や建物には、組合加入を示す看板が掲げられている (図8)。

まず、組合員のうちで最も多いのが、農村民宿や貸別荘、レストランを兼業するホテルレストランといった宿泊施設である。スティーブンスンの道は、行程距離の長さから最大2週間弱かかるため、ランドネ旅行者は宿泊施設の利用が必須となる⁸⁾。宿泊形態として主流なのは、シャンプル・ドット (Chambre d'hôtes) と呼ばれる農村民宿



図8 スティーブンスン組合加入を示す看板
(2011年8月撮影)

である。シャンプル・ドットは、農家や村民の家の一部を改装した施設であり、朝食などのサービ

スを自分で選択することが可能で、一泊約40～70ユーロ程度となっている。シャンブル・ドットは、中高年やカップル、少人数グループの旅行者が好む傾向にある宿泊施設である。一方、シャンブル・ドットに続いて主流なのはジット（Gîte）と呼ばれる貸別荘で、使わなくなった家屋などを利用した長期滞在型の宿泊施設である。ジットでは、大人数での友人同士や家族連れ、若者が宿泊することが多く、シャンブル・ドットよりも安価となっている。ジットにも場所によって完全自炊の長期宿泊施設と宿主の常駐する短期や一泊も可能な施設があり、スティーブンスンの道では後者が主に選択されている。

宿泊施設に次いで多いものは、ロバ貸し業者や旅行者向け荷物運送屋、文化施設や施設地主などの観光関連主体である。文化施設としては、地域の博物館や文化施設、あるいは地域外の芸術協会や美術館など作家スティーブンスンに限らない文化的な繋がりもみられる。同様に地域内外からの組合員としては、ランドネ団体が挙げられる。ランドネ団体は、スティーブンスンの道が分布するオート・ロワール県、ガール県アルデシュ県だけではなく、フランス北部のピカルディー地域圏やパ・ド・カレ地域圏からも参加がある。そのほかでは県議会や観光協会、コミューンやベイ、地域圏といった行政機関の参加も多い。いずれも、ツーリズムに関わる部署や組織、スティーブンスンの道に分布する地域の行政が加入している。組合員全体の分布としては、旅の出発地であるモナステイエ村、スキー観光地であるブレイマール周辺、そして組合本部のあるボン・ド・モンペールに集中している傾向がある。

このように、スティーブンスンの道組合の主体をみると、多様な団体や地域主体が、文化的資源とランドネを通して広範囲に新たな連携を構築していることがわかる。

3. 組合の活動と支出

スティーブンスンの道組合の組織実態を把握するために、組織の支出入を表2にまとめた。2013年のスティーブンスンの道組合の総支出入はそれぞれ16万ユーロである。まず支出をみると、支出第一位は人件費となっており、これは本部に勤務する事務員への支出である。続いて第二位の支出は、ヨーロッパにおける文化的なランドネルートに関わる費用で、ヨーロッパ内における新たな連携やスティーブンスンの道組合の年次大会、あるいはスティーブンスンの道を広める資料費などに充てられている。そしてこれに続く支出は、スティーブンスンとランドネの宣伝費用に充てられ、特に英語・仏語のパンフレットや広報費が該当している。そのほかでは、ローカルな地域連携やランドネ団体同士の連携といった運営促進費用に支出は充てられている。

一方、収入をみると、スティーブンスンの道組合の運営は、組合員費と補助金によって成り立っていることがわかる。特に、政府やEU、各種行政補助金の収入割合は全体の約71%に及び、組織にとって欠かせない収入源となっている。補助金の内訳をみるとEUやフランス、地域圏、県、国立公園、コミューンと複層的な空間スケールから受給していることがわかる。金額が大きいものとしては、EUによるLEADER事業（Liaisons Entre Actions de Developpment de l'Economie Rurale：農村経済発展のための活動連携）の3.6万ユーロ、そして同じくEUによる農村経済の発展と開発を目的としたマッシュフ・サントラルプログラム（2007～2013年）の1.3万ユーロが挙げられる。そのほかでは、スティーブンスンの道に関わる地域圏であるラングドック・ルシヨン（2.6万ユーロ）やオーベルニュ（1.3万ユーロ）のほか、県の単位ではオート・ロワールやロゼールガールなどから1.9万ユーロ、セヴェンヌ国立公園への

表2 スティーブンスンの組合の支出入（2013年）

支出	金額 (ユーロ)	収入	金額 (ユーロ)
諸経費	8538	組合収入費用	42,970
プロモーション費用	19,470	組合員分担金	37,425
パンフレット	14,167	スティーブンスン物販売上	1,500
サロン	2,525	繰越金	4,045
インターネット	800	政府・EU・行政補助金	116,005
看板・パネル	950	LEADER事業 (FEADER)	36,005
小冊子	678	マッシフ・サントラルプログラム	13,000
その他	350	オーベルニュ地域圏	8,000
運営促進費用	9,118	ラングドック・ルシヨン地域圏	26,500
ローカル連携	6,124	オート・ロワール県	3,500
ランドネ連携	2,994	ロゼール県	6,000
「ヨーロッパ文化ランドネルート」費用	24,448	ガール県	3,000
新たな連携のための活動	4,156	ガール県観光組合	3,000
スティーブンスンの英仏映像資料	1,902	セヴェンヌ国立公園	6,000
ヨーロッパでの活動連携	3,198	ロゼール県議会	3,500
「スティーブンスン組合」年次大会	7,450	周辺コミュニケーション及びコミュニケーション連合	5,500
その他	7,742	総計	162,010
人件費 (事務3名)	100,434		
総計	162,010		

（「スティーブンスン組合」提供会計資料より作成）

補助金0.6万ユーロ、そして各周辺コミュニケーションからの0.5万（各コミュニケーション100～1,000ユーロ補助金）となっている。これらは、スティーブンスンの道組合と地域主体の宣伝・活動によって得られた補助金であり、多様な空間スケールからの助成金を獲得することで運営を維持している。

一方、補助金と共に重要な運営費となるのが組合員からの収入費用である。スティーブンスンの道組合への加入条件には、組合員の職業や団体の規模によって定められた年会費を納入する必要がある。例えば宿泊施設の場合、キャンプ場は156ユーロ、農村民宿は261ユーロ、ホテルは417ユーロといったように、旅行者が消費する金額の多寡によって組合員費が定められている。また、宿泊施設の設定が増えると組合員費も上昇し、例えば夕食も提供する農村民宿であれば374ユーロ、ホテルレストランであれば522ユーロとなる。そのほか営業形態やその業種の観光収入に応じて年会

費は設定される⁹⁾。

支出入との関連において、いかなる活動がスティーブンスンの道組合によって行われているかを、2013年のスケジュールから表3に整理した。まず、組合の活動は主に集会和宣伝活動であり、これらは組合主体の活動、関連大会・集会、展覧会・イベントの3つに大別できる。まず、組合主体の活動としては、組合内における部会や報告会が中心となり、いずれもスティーブンスンの道沿いの村落で開催される。部会は各部門の役割と成果を相互把握するため、代表者に加え観光協会や地方新聞社を交えて4カ所で開催し、2013年4月全体では計64名が参加している。そのほかとしては組合主催のランドネと環境についての意見交換会「道の発見」ネットワークや、フランス国内のスティーブンスンの道組合に関わる団体総会「ランドネネットワーク会」が開催される。

スティーブンスンの道組合は、地域内外での観

表3 スティーブソン組合の集会・プロモーション活動（2013年）

	日時	名称	内容	開催場所	備考
組合主体の活動	4月10日	アキューエイユ・デー・アース	組合本部との会合および連絡交換会	プッセグール	全会員が参加可能。20数名が参加。
	4月4日	モン・ロゼール部会	2010年から毎年開催。各部門ごとの役割が明確化したので、より互いの連携をとるために開催している。それぞれの地方ごと開催しており、すべて合わせて64名の参加	ボン・ド・モンペール	代表者6名が参加
	4月9日	ジエヴォダン部会		シヨセラデ	代表者18名。地方新聞社含む
	4月12日	セヴェンス部会		S.T.ヴァレフランセ	ランドネ協会、観光協会、地方新聞社含む
	4月16日	ヴレイ部会		モナスティエ	代表者21名。ランドネ協会、観光協会、地方新聞社含む
	11月13日	「道の発見」ネットワーク	8kmの行程で、自然の遊歩道を歩き自然環境と観光について意見を交わす	ラ・バステイド・ビュイロラン	全会員および観光協会に周知し、参加は自由
2月19日	ランドネネットワーク会	フランス国内のスティーブソン組合団体との会合。スティーブソン組合の全関連委員会が出席	ランゴーニュ	FFRとのコースについての協議、組織連携、20周年記念委員会、ハイカー調査など。ジュラやアルスのランドネ連合とも会合	
関連大会・集会	2月22日	「地域の対話」会合	同じ地域での行政や市民、そのほか団体との対話会	フローラック	フランスでは全土にこのような会合が設けられている
	3月16-17日	FFR連合大会	フランスランドネ協会による全国大会	ストラスブール	
	5月17日	「地域の対話」戦略会合	地域の対話会合に関する南仏での会議	モンペリエ	
	9月26日	LRADER連絡交換会	組合が補助金を受けるLEADER関連行政との連絡会	クレルモン・フェラン	LEADERは山村地域振興のEUプログラム
	10月14日	グリーン・フランスフォーラム	マッシフ・サントラルにおける観光大会	クレルモン・フェラン	観光に関連する発表や出品が多い大きな大会
	10月16日	ランドネ地域観光大会	テーマに沿ったランドネに関する発表	プロワ	2013年のテーマは「自然に優しい(doux)ランドネ」
展覧会・イベント	3月15-17日	「ランドフォリ」サロン	アヴェンチュランドが主催するランドネ団体の展覧会	イル・エ・ヴィレン	展覧会への出品を通して、地域に広く宣伝効果を期待する
	3月16日	フォアグラ・ド・ランゴーニュ	フォアグラに関連するローカルな食産品のイベント	ランゴーニュ	ローカルな祭でローカルな人々に道の存在を知ってもらう
	3月22-24日	リヨン・ランドネ・サロン	ランドネ団体が集まる大規模な展覧会	リヨン	ランドネネットのための文化の活用についてブースで発表
	4月4-6日	ロゼール県ミクワマルシェ	ロゼール県の観光課が主催する観光イベント	リヨン	サンジャック巡礼路などのほかランドネ団体も多数参加
	4月12-13日	アヴィニオン都市交流会	オート・ロワール県とアヴィニョンの文化交流会	アヴィニオン	県観光課が毎年スティーブソンの道について発表
	9月7日	組合フォーラム	スティーブソン組合への賛助団体との交流イベント	フローラック	組合20周年の詳細について発表および意見交換

（スティーブソン組合員向け年次活動報告書より作成）

光関連団体の見本市や集会、博覧会への参加も多い。これらは、ストラスブールで開催のFFR連合大会のほか、クレルモン・フェランの観光集会「グリーン・フランスフォーラム」、プロワで開催の「ランドネに関する地域大会」などであり、行政に関わる会合への参加もみられる。そのほかでは、地域内での行政・市民・団体による「地域の対話」会合やLEADER事業の連絡会など、地域中心の活動も重要である。また、スティーブソンの道組合では展覧会やイベントへの出展が多く、宣伝によるスティーブソンの道の周知にも努めている。これらは、例えばリヨン開催のランドネの展覧会や県主催の交流イベントのほか、ローカルな食産品イベントやランドネ団体による合同展覧会などが該当する。

このように、スティーブソンの道組合では、活動範囲を県や郡といった地域やローカルを中心としながらも、フランスの中南部を中心に広域的に連携を広げ、他団体との交流と宣伝を通じてツーリズムを拡大させている。他地域のツーリズ

ムや行政、ランドネ団体との連携は、新たな資金獲得への手段ともなっている。

IV 旅行者からみるランドネと文化的資源

1. ランドネの旅行形態

スティーブソンの道組合および地域にとって、ランドネを訪れる旅行者をいかに集客するかは重要な関心事である。スティーブソンの道へのランドネ旅行者は、GR70の開設以来徐々に増加しており、2012年では5月～10月のハイシーズンに6,000人以上が訪れている¹⁰⁾。スティーブソンの道組合によると、ランドネ旅行者による経済効果は290万ユーロ（約3億円）にのぼり、2010年の調査ではこれらの消費金額のうち71%が宿泊施設、19%が購買行動、9%がレストラン、5%が荷物の運送サービスとなっている¹¹⁾。ランドネを訪れる旅行者は、平均して1泊に48.9ユーロ、全日程では平均467ユーロを消費しており、ルート沿いにある13のコミュニティでは合計して年間10万ユーロの経済効果があるという。

旅行者がどのようにステーブソンンの道にアクセスしているのかを往路と復路から図9に示した。まず往路をみると、自動車による移動が最も多く、ランドネのために体力を消耗せずにアクセスする意図がみられる。また、続いて多いものは列車で、ル・プエイ・エン・ヴレイ駅まで列車で来た後に、モナステイエ村までの約20kmをタクシーや徒歩で移動している。一方復路をみると、往路に比して列車、バス、徒歩の利用が増え、反対に自動車の利用が往路に比して少ない。これは往路をレンタカーでアクセスする旅行者が一定数いることと、復路は旅の後そのまま徒歩やバス帰路につく旅行者がいるためである。

ステーブソンンの道における旅行者のランドネは、90.7%が徒歩のみの行程である¹²⁾。そして全体の36%が旅行者向けの荷物の運送サービスを利用し、7%が「ロバ貸し」を利用している。ロバ貸しはフランスで人気の観光サービスであり、利用者は一日40ユーロ程度でロバを借

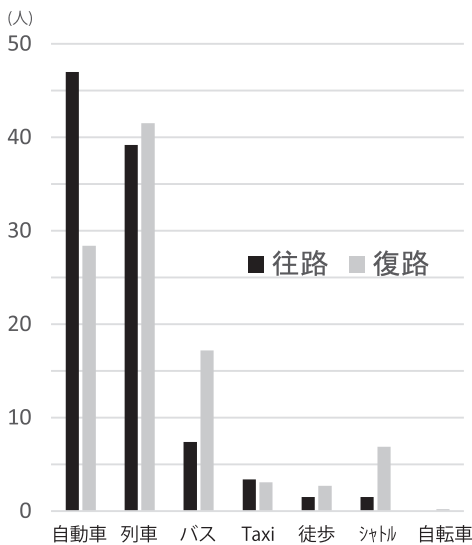


図9 ランドネ・ツーリストのアクセス手段 (2013年)

(Association sur le chemin de R. L. Stevenson (2011) により作成)

り、荷物を括るないしは子供を乗せランドネに出る (図10)。一方、全体の36%が利用する荷物の運送サービスは、宿から宿へと装備以外のスーツケースや荷物を送り、軽装でランドネに出ることを可能にするサービスである。

2. 旅行者の2類型と特徴

ランドネに訪れる旅行者について、彼らの属性と旅の内容を中心にアンケート及び聞き取り調査からまとめたのが表4である。調査はステーブソンンの道の出発地モナステイエ村で、シャンブル・ドットとジットの2か所で行なった¹³⁾。ランドネ旅行者は、滞在の長さによって装備やランドネ目的、行程が異なることが考えられるため、調査対象とした旅行者22組 (49名) を旅程日数の長さによって1週間以内の「短距離ランドネ型 (以下、短距離型)」(No.1~9) と1週間以上の「長距離ランドネ型 (以下、長距離型)」(No.10~22) の2類型に分類した。

まず短距離型は、行程50km~200kmほどを6日以内の日程で歩く旅行者たちである。この類型は、女性のグループ (No.2, 4, 5) や女性の単独 (No.1, 3), あるいはカップル (No.6~8) が中心で、年齢は30~40歳代と60歳代が多い傾向



図10 ロバと伴に歩くランドネ観光客

(出典: Fédération française de la randonnée pédestre (2013))

表4 モナステイエ・シュル・ガゼイル村におけるランドネ旅行者の属性と旅の内容 (2013年)

類型	No	年齢(歳)	性別	居住地	職業	旅の目的	来訪経験	宿泊施設	旅の選択指針	読書経験	旅に期待すること	生活でのランドネ	旅程期間	行程距離	旅行月		
短距離ランドネ型	1	72	女	トゥール	年金者	来れない人の代わりに来訪するため	無	①	友	旅	自然景観、ステイブンスンの足跡	日常的	1日		5月		
	2	64	女	パリ郊外	年金者	自然の空間でルート歩くこと、特別な場所を体験すること	無	①	本、友、ガ	-	-	自然景観、植物、ステイブンスンの足跡	日常的	5日	83km	6月	
		63	女	パリ	年金者	地域の発見、友達と歩くこと	無										
	3	62	女	イルド・フランス	年金者		無	①	友	-	-	歴史	非日常	5日			
		51	女	ベルギー・マルヌ	会社員	自然の中で体を動かすこと	有										
	4	34	女	ノール県	会社員	友達と歩くこと、食事、新たな発見	2回	②	本、友、ラ	-	-	旅、宝、博	景観の発見、歩きながらランドネをすること	非日常	5日	80km	7月
		36	女	リール	都市計画	遺産、テロワール、食事	無										
		31	女	オルレアン	会社員	「歩くことは思考、歩くことは会話」という言葉を聞いて	無										
		40	女	リール	語学教師		無										
	5	43	女	オート・ロワール	薬剤師	自然の中に身を置くこと、新たな地域と景観の発見	数回	②	本、友	-	-	旅、宝	自分の地域を新たな側面、歩く喜び、作家が見た地域の体験	非日常	5日	80km	7月
		44	女	ノール県	薬剤師												
	6	29	女	南東フランス	獣医師	休暇と発見	無	①	友	-	-	n.d.	n.d.		6日	238km	8月
31		男		エンジニア													
7	61	男	サルト県	工芸職人	ステイブンスンが歩いた地域とランドネルートの体験	無	①	本、ガ、ネ	-	-	植物、農村景観、自然景観	日常的	6日	212km	5月		
8	70	男	サントル	元教員	セヴェンスを足で歩いて旅と巡礼の喜びを得るため	無	②	本	-	-	旅、宝、博	自然景観、地域の歴史、小道を辿り地域を横断	日常的	6日	59km	7月	
9	74	男	ロワール・アトランティック県	年金者	家族でランドネすること、異なる地域を家族で旅すること	n.d.	②	本、友	-	-	旅、宝、博	歩く喜び、旅行、俗世から離れること	日常的	3日~		8月	
	61	女		年金者													
10	63	女	エソンヌ県	医師	歩く喜びのため	無	②	友	-	-	宝、博	景観、自然、	非日常	7日	80km	7月	
	54	女		教員													
11	27	女	パリ	会社員	気分転換、スポーツ、遺産	無	②	本、知	宝	宝	景観、食事、人との出会い	中間	8日	161km	7月		
12	64	男	ブルターニュ	年金者	ステイブンスン作品の中の地域と世界の体験	無	①	本、新、チ	-	-	宝、博	景観、植物、食事	両方	10日	191km	n.d.	
	64	男	パリ	年金者													
	58	女	ブルターニュ	公務員													
	62	女	ブルターニュ	年金者													
61	男	サルト県	年金者														
13	73	女	トゥール	年金者	フランスで新しい地域を知るため	有	①	本、友	-	-	旅、宝	自然景観、農村景観、植物	日常的	11日	212km	5月	
	70	女		年金者	人々との出会い、美しいセヴェンスでの休息	無											
14	53	女	カルヴァドス県	保育士	健康と運動、ハイキング	無	①	友	宝	宝	自然と過ごすこと、体を動かすこと	日常的	12日	238km	4月		
15	55	男	不明	教員	歩くため	数回	②	友、ガ	宝	宝	自分が12日間にわたって歩けるのかどうかに期待	非日常	12日	212km	7月		
16	54	女	ブルターニュ	教員	気分転換、歩くため、自然に身を置き禅を得るため、緩やかになるため	無	②	本、友	旅、宝、博	旅、宝、博	自然景観、農村景観、ステイブンスンの足跡	両方	12日	238km	7月		
17	53	男	ローヌ・アルプ	職工	ランドネへの情熱	無	②	n.d.	-	-	旅	自然に身を置き新鮮さを得ること	日常的	13日	260km	7月	
	54	女		病院勤務													
18	29	女	パリ	映像制作	気分を変える、歩くこと	無	②	本、ガ	-	-	-	自然景観、新しいフランスを発見	両方	13日	238km	8月	
	29	男		映像制作													
19	61	女	ドルドールニュ県	教員	歩く喜び、旅での発見、喜びを分かち合うため	無	①	本、友、ガ	宝、博	宝、博	ステイブンスンの足跡、人々と景観、農地、修道	日常的	13日		5月		
20	72	女	ロワール・アトランティック県	年金者	違う地域の発見、コンポステラ巡礼路よりもマイナーな巡礼に惹かれて	無	①	友	-	-	-	歩く喜び、居住する地域と異なる場所への探訪	日常的	13日	238km	n.d.	
	69	女		年金者													
21	59	男	オランダ	教員	歩くことが目的	無	①	本、友	-	-	-	農村景観、自然景観、植物、食事、ステイブンスン	日常的	未定	3月		
	61	女	オート・ソーヌ県	獣医師													
22	31	男	スイス・ベルン	音楽家	健康のため	無	②	友	-	-	-	自然、様々な景観、人々	非日常	未定	238km	7月	
	54	女	ブルターニュ	教員													
	59	女		教員													

友:友人・知人 ガ:ガイドブック 新:新聞 チ:チラシ・販促物 ①:シャンプルドット(民宿) ②:ジット(簡易宿)

旅:『旅はロバを連れて』宝:『宝島』博:『ジギル博士とハイド氏』短編集:『ステイブンスン短編集』 n.d.:No Data - :該当なし

(アンケート及び聞き取り調査より作成)

にある。全21人のうち年金生活者は7人と3割以上は60歳以上であり、全体に占める女性比率は80% (17人) である。宿泊施設は、中高年において農村民宿が選ばれる傾向にあり、若い旅行者ほど比較的安価な貸別荘を選択している。ラ

ンドネ旅行者の旅の目的をみると、「遺産、テロワール、食事」(No.4, 36歳女性)や「ステイブンスンが歩いた地域とランドネルートの体験」(No.7, 60代夫婦)のような文化的体験、あるいは「特別な場所を体験」(No.2, 64歳女性)、「友

達と歩くこと」(No.4, 34歳女性), 「家族でランドネすること。異なる地域を家族で旅すること」(No.9, 家族)といった個人的志向に基づく目的がみられる。また, 日常的にランドネをしているものとランドネの初心者が混在しており, どちらも書籍や友人からの口コミなどを契機に旅を決めている。全体的にみると, 年齢や経験によって行程距離やその目的に差があるのがこの類型の特徴といえる。

一方, 7日以上の日程を組み, 行程100km～240kmを歩く旅行者が長距離型である。短距離型に比べて少人数のグループが主流で, 比較的女性の比率が低い(65%)。年齢層は, 50歳代から70歳代前半までの中高年割合が83%(23人)と非常に高く, 年金生活者の割合は32%(9人)である。短距離型よりも, 日常的にランドネを行っているものが多く, 中高年でも10日以上を超える旅程に耐える旅行者が多いことがわかる。宿泊施設の選び方や旅の決め方は様々であるが, 旅の目的については歩くことそのもの(No.10, 15, 16, 18), あるいは歩く喜びやランドネへの高い関心(No.11, 17)が多く, 「健康」(No.14, 22)や「スポーツ」(No.11)といったキーワードにみられるように, 身体に関わる動機が多くみられるのが長距離型の特徴である。

両類型には共通点もいくつかみられる。まず, 旅行者の大半(96%)はフランス人旅行者であり, その居住地はセヴェヌ地域よりも北に位置する地域であることである。この傾向は, 北から南へと南下するフランス人のバカンスにおける移動傾向をよく示しており, フランス南部地域からの旅行者がいないことも同様である。また, 全体としての特徴は, 60歳以上の中高年層や女性が多く, 文化的な体験と身体的な体験の両方が旅の目的とされていることである。

3. 旅行者の読書経験と旅への期待

ランドネ旅行者と文化的資源との関係を知るために, 本研究では旅行者の読書経験と旅への期待に注目した(表4)。これをみると, スティーブソン(Stevenson)の紀行文『旅はロバを連れて』の読書経験は22組中9組のみであり, そのほかの13組は紀行文の存在を知ってはいても未読であった。スティーブソン作品の読書経験者の多くは, 『宝島』『ジキル博士とハイド氏』へと集中しており, 特に『宝島』に関しては13組が既読と回答した。このことから, 多くのランドネ旅行者にとって, スティーブソンの世界とその文化的体験はランドネの主目的ではなくあくまで「旅の一部」に過ぎないということがわかる。

文化的体験が旅の一部となった場合, 彼らは何に期待をしてランドネの旅に出るのか, という点について「旅への期待」からみてみる。旅行者の期待は, 大別して文化的なものへの期待, 自然との関わりへの期待, そして「発見」への期待の3つに整理される。まず文化的な期待としては, 「スティーブソンの足跡」をキーワードに, スティーブソンの見た景観や地域にふれるあるいは紀行文の追体験(No.1, 2, 5, 13, 19, 21)が挙げられ, そのほか「農村景観」(No.7, 13, 16, 21)や「農地」(No.19), あるいは「(地域の)食事」(No.11, 12)や「歴史」(No.8)への期待がみられる。

一方, 自然との関わりへの期待としては「自然景観」(No.1, 2, 7, 11, 12, 18, 21)や「植物」(No.7, 12, 13), 「自然」(No.22)といった自然そのものに関することに加え, 「自然と過ごす」(No.14), 自然から得られる「新鮮さ」(No.17)など, 自らと自然との関わりも旅において重視されている。最後に, 「発見」をキーワードとする旅への期待に関しては, 「景観」(No.4)や「新しいフランス」(No.18), 「異なる場所」(No.19)といったものや,

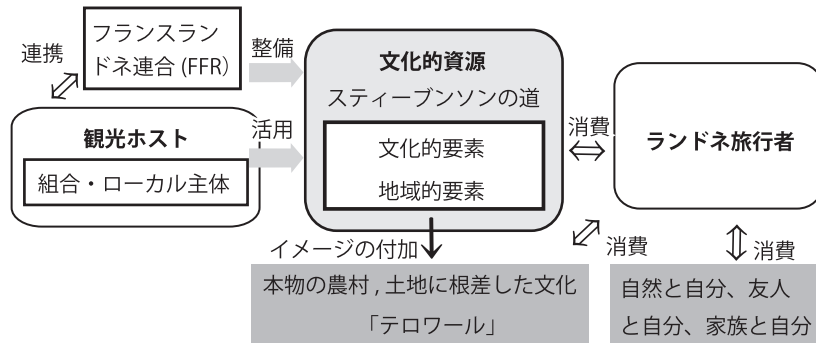


図11 ランドネの活用による文化的資源とツーリズムの関係

農村に住む「人々」(No.11, 13, 19, 22)のように、自らが知らない場所を発見することに対する期待がみられ、なかでも都市や発達した文明から遠く離れた場所というイメージから派生する期待が存在している。これらは、山村にある「本物のフランス農村」あるいは「土地に根差した文化」といった旅行者のイメージを含んでいるといえる。

V 文化的資源とツーリズムの関係 —むすびに変えて—

スティーブンスンの道は、山村に埋もれた文化的資源を、ローカルな主体がランドネを通じて再活用することで実現したツーリズムである。このツーリズムの再活用の過程とその形態から、文化的資源とツーリズムの関係は図11のように整理される。

スティーブンスンの道に関わるのは次の4つの要素であり、「フランスランドネ連合 (FFR)」、 「観光ホスト」、 「文化的資源」、 そして「ランドネ旅行者」である。スティーブンスンの道における文化的資源の再活用は、FFRの存在がまず大きい。1980年代よりフランスで盛んとなった歩くツーリズムやランドネの拡大を背景に、FFRがスティーブンスンの道をグラン・ランドネへと指定したことがツーリズム資源化の契機を導いた。そ

して、スティーブンスンの道という文化的資源をローカルな主体と共にツーリズム化させたのが「観光ホスト」であるスティーブンスンの道組合である。彼らは、ツーリズムに関わる地域の主体や行政主体、他のランドネ団体や文化施設とのネットワークを地域内外へと拡大させてきた。その手段は、博覧会や集会、展覧会への出展や宣伝、あるいは地域内外の行政機関との連携であり、これらが新たな補助金の獲得やツーリズム運営の拡大を可能にさせたといえる。また、スティーブンスンの道組合の組織は、少ない初期投資と維持管理費によって運営され、ツーリズムに関わるなるべく多くの主体にある程度の規模の恩恵を少しずつ与えるという点が特徴である。彼らにとって文化的資源によるツーリズムは生業の一部に過ぎず、そのことがスキーのような大規模な開発とは異なるオルタナティブなツーリズムを実現させたといえよう。

これら文化的資源の再活用によるツーリズムは、ランドネ旅行者によって消費されていた。ランドネ旅行者はその消費の対象を、文化・地域的要素としての「文化的資源」、「自己の体験」、そして「地域・文化に対するイメージ」へと向けていた。文化的資源は、紀行文や作家の追体験、あるいは自然や遺産、歴史など、観光ホストが提供

あるいは提案する文化的資源であり、これらはホスト側が想定するツーリズム要素でもある。他方、ホスト側からみたツーリズムとは別の目的や期待が旅行者には存在し、その一つがランドネを通じて得られる自己の体験であった。この自己の体験は、ランドネを通じて「自然」あるいは「友人」、「家族」などと時間を共有することで生まれる喜びであり、ランドネが単なるスポーツとしての歩くアクティビティを超えた意味も持つことを示している。

また、ランドネ旅行者の消費の対象には、旅行者たちの地域・文化に対するイメージも含まれていた。彼らはまだ知らぬ土地や遠く離れた場所での新たな「発見」を旅に求め、それらは「本物の農村」、あるいは「土地に根差した文化」がフランスの遠い奥地山村に色濃く残っている、というイメージに支えられている。こうした旅行者のイメージの背景には、土地や自らの生れた場所との結びつきが強いフランスの「テロワール」(Nadeau et Barlow, 2013)が存在しており、まだ見ぬ土地への何かを求める欲求、そしてテロワールを強く感じる場所としての隔離された山村イメージが、セヴェンヌのランドネへと旅行者を駆り立てていると考えられる。ステイブンスンの道にみるランドネを通じたこのツーリズム形態は、ランドネ旅行者自身とそれに対する地域・文化・自然・テロワールとの相互作用の過程にあるツーリズムということができよう。

【付記】

本調査にあたっては、モナステイエ・シュル・ガゼイユ村の民宿「Blaisine et Philomène」および貸別荘「Gîtes d'Etape Stevenson」の経営主の方々、ステイブンスンの道組合の皆様、ランドネに訪れたフランス人旅行者の皆様、モナステイエ村民の方々に多大なるご協力をいただきました。末筆ながら上記して感謝申し上げます。本稿の骨子は、2014年度地理空間学会

(筑波大学)において発表した。本研究は、日本地理学会小林浩二研究助成(2013年度)「文化的資源の再活用と農村ツーリズム－英国紀行文とフランス山村地域に関する研究－」の成果報告の一部である。

注

- 1) 「ランドネ (Randonnée)」は、徒歩やマウンテンバイク、馬など様々な手段を含み、徒歩によるランドネは正式には「ランドネ・ペデストル (Randonnée pédestre)」と呼ばれる。しかし、フランスでは一般的に「ランドネ」というと徒歩によるものを指すことが多いことから、本稿では「ランドネ」という語を徒歩によるものとして使用する。
- 2) フランスのスポーツ団体CARAT Sportsによる2005年の国民調査では、フランス人が好むスポーツとしてランドネが68%と最も多く回答され、二位が水泳、三位がテニス、四位がサッカーであった。
- 3) スティープンソンは紀行文『旅は驢馬をつれて』のなかで自身の旅について次のように述べている。「私は常に冒険を求めている、(中略)全然見覚えがない環境に置かれ、いわばどこかの島に漂着した経験を陸地ですることは、私の日頃の夢が一部再現したようなものだった」、「私が旅行をするのはどこかに行くためではなく、どこにでも、とにかく行くのが目的なのである。私は旅行するために旅行する」(スティープンソン, 1951)。
- 4) 生涯を旅に捧げたといっても過言ではないスティープンソンの滞在先と放浪の日数は大変多く、吉田(1999)によると36歳の時点で英仏だけで210カ所の土地への訪問と滞在をしており、さらにアメリカと南太平洋を加えるとさらに膨大な数に及ぶ。
- 5) この紀行文は我が国でも多数邦訳されており、戦前では1927年出版の『英文世界名著全集第六巻』における『驢馬紀行』(澤村虎二郎・酒井善孝訳注)のほか、文化生活研究會版の1929年出版『驢馬と旅して』(藤田千代吉訳)、文芸春秋新社の1942年出版『風流驢馬旅行』(吉田健一訳)などがある。戦後では、岩波書店から1951年に『旅は驢馬をつれて』(吉田健一訳)をはじめ、近年では2004年にみすず書房から『旅は驢馬をつれて』(小沼丹訳、江國香織解説)などが刊行されている。
- 6) FFRは、Fédération Française de la Randonnée Pédestreの略称で、1947年に発足したランドネに関わる総合的な業務を行う全国団体である。
- 7) Topo-Guides (トポ・ギド)は、フランスでは著名なハイキングガイド本で、全国各地の様々なルー

トを地図や周辺の歴史施設・自然・レストラン・ホテルなどの情報と共にまとめたものである。本のなかの記述には、地域の歴史的史実や文化についての学術的な小論なども掲載されている。

- 8) この地域は山間地域のため、夜間は非常に暗くテントによる野宿には危険を伴ううえ、中高年層には体力的に厳しい。道沿いには民宿を有する山村が点在しているため、旅行者の大半はこれを利用する。
- 9) そのほかでは、ロバ貸し業で349ユーロ、旅行者向けの運送屋は261ユーロ、宿泊者組合は349ユーロ、文化施設では有料施設が183ユーロ、無料施設が20ユーロなどとなっている。
- 10) ランドネは、個人的な観光行動のため訪問者数を毎年把握することは難しいとされるが、スティーブンスンの道組合によると、2010年のハイシーズン時のランドネ者は6,142人であったという。
- 11) 2010年にスティーブンスンの道組合では、旅行者に対するアンケート調査をしている（Association sur le chemin de R. L. Stevenson, 2010）。これによると、宿泊でいうと年間で総計59,000泊の滞在があり、旅行者の1組の平均人数は4.45人で、全体の約80%がフランス人旅行者である。
- 12) スティーブンスンの道組合の提供資料（Association sur le chemin de R. L. Stevenson, 2011）による。
- 13) 筆者が調査を行ったのは、民宿「Blaisine et Philomène」および貸別荘「Gîtes d'Etape Stevenson」であり、旅行者の回答は4～8月のランドネが盛んになるシーズンである。

文 献

- スティーブンスン, R. L. 著, 吉田健一訳 (1951年): 『旅は驢馬をつれて』. 岩波書店. Stevenson, R. L. (1879): *Travels with a Donkey in the Cévennes*. London: C Kegan Paul & Co.
- 広本勝也 (2005): R. L. スティーブンスンの生涯－父性との葛藤－. 慶応義塾大学日吉紀要 英語英米文学, 46, 207-245.
- 吉田みどり (1999): 『トウシターラ 物語る人－R・L・スティーブンスンの生涯』 毎日新聞社.
- Association sur le chemin de R. L. Stevenson. (2010): Étude des retombées économiques des randonneurs du chemin de Stevenson - année 2010. Association sur le chemin de R.L. Stevenson.
- Association sur le chemin de R. L. Stevenson. (2011): Mise en place observatoire, Profil, Satisfaction, Attentes et Fréquentation des randonneurs sur le chemin de Stevenson. Association sur le chemin de R.L. Stevenson.
- Bancaud, H. (2007): *Sur le chemin de Stevenson*. Rennes: OUEST-FRANCE.
- Berthelot, J · Hantz, C · Bel, G. (2012): Au-delà des chiffres, les enseignements de l' Observatoire des pratiques itinérantes du Vercors. Au sommaire du dossier du Cahier Espaces, 112, 45-56.
- Chaumereuil, G. (2012): L'itinérance-un tourisme en marche dans les Alpes. *Au sommaire du dossier du Cahier Espaces*, 112, 85-90.
- CMA Haut-Savoie. (2011): Analyse de marché – La marché des sports outdoor –. CMA 74.
- Corneloup, J. (2012): L'itinérance, une pratique récréative en mouvement. *Au sommaire du dossier du Cahier Espaces*, 112, 8-20.
- Farama, J. (2012): La randonnée itinérante produit des chiffres. L'exemple du chemin de Stevenson. *Au sommaire du dossier du Cahier Espaces*, 112, 57-63.
- Fédération française de la randonnée pédestre. (2013): *Topo Guides GR70-Le Chemin de Stevenson*. Condé-sur-Noireau: CHAMINA edition.
- Guilbert, B. (2003): *Pratique de la randonnée pédestre en séjour touristique en France: étude de clientèle*. Les Cahiers de l' AFIT.
- Humeau, J. M. (2012): La FFRandonnée, acteur du développement touristique. *Au sommaire du dossier du Cahier Espaces*, 112, 128-130.
- Muller, E. (2012): Grandes Traversées du Jura. Itinérance et développement dans les montagnes du Jura. *Au sommaire du dossier du Cahier Espaces*, 112, 109-113.
- Nadeau, J. B. et Barlow, J. (2013): *Pas Si Fous, Ces Français*. French & European Pubns.
- Pôle Ressources National Sports de Nature. (2011): Production du groupe ressources < littoral > Randonnée pédestre. National Sports de Nature.
- Tijou, C. (2012): L'itinérance, un enjeu fédérateur pour le Massif central. *Au sommaire du dossier du Cahier Espaces*, 112, 125-126.
- Versant Sud et Altimax. (2009): De l' itinérance aux pratiques itinérantes: vers un nouveau tourisme. Etude Itinérance 2009, GTA-FFRando-FF-CAM-SNAM.
- Warolin, N. (2009): *Voyage avec un âne dans les Cévennes*. Luçon: Rouergue.

**Randonneuring and tourism in the Massif Central in France: Robert Louis Stevenson's
*Travels with a Donkey in the Cévennes***

ICHIKAWA Yasuo*

*Faculty of Life and Environmental Sciences, University of Tsukuba

The present study aims to clarify the relationship between randonneuring and tourism in the Massif Central in France using tourist referencing of Robert Louis Stevenson's *Travels with a Donkey in the Cévennes* as a case study. Route maintenance by the Fédération Française de la Randonnée Pédestre was an opportunity for the establishment of the Stevenson Trail, which was realized by the association Sur le Chemin de R. L. Stevenson. As a form of alternative tourism, the main purpose of the Stevenson Trail was not to generate profit for the Association but to local development. For its part, the Association achieved financial stability through subsidies from the EU, French, and local governments. Meanwhile, randonneuring tourists were motivated by the opportunity for self-discovery amid cultural exposure and images. Tourists were mostly driven to join a randonneuring of the Cévennes by a desire to explore unseen land and take in the *terroir* of mountain villages. The Stevenson Trail is considered as a type of tourism activity that enables randonneuring tourists to interact with culture, nature, and terroir.

Keywords: randonneuring, cultural resource, travelogue, *Travels with a Donkey in the Cévennes*, tourism, France